

# 語義域分析と聖書釈義

—聖書文献へのコンピューター利用によせて—

伊藤利行

## 序

本稿は、昭和59年度文部省科学研究費補助金（奨励研究A）〔卓上電子計算機によるオリゲネスのヘクサブラにおけるヘブライズムとヘレニズムの研究〕と昭和59年度筑波大学学内プロジェクト研究費（奨励研究）〔ギリシア語及び日本語聖書における文化対応の研究～電子計算機による Wortfeld 分析の試み〕により研究中の事柄に関連して中間報告として発表するものである。

両研究ともにコンピューターの利用と関係しているがコンピューターを聖書の研究に用いる際のより具体的な問題については、稿を改めて論ずる事とし、本稿では紙面の制約もあるので筆者が試みようとしている語義域分析と聖書釈義との関係を中心に考えてみたいと思う。

## 第1節 聖書研究へのコンピューター利用

電子計算機の歴史は通常1946年にアメリカのペンシルバニア大学で完成された18,800本の真空管を使用した電子計算機 ENIACをもって始まると言われる。1951年になると最初の商品化されたコンピューター UNIVAC I が UNIVAC 社から発売され大型コンピューター時代が始まった。1964年になると IBM 社の大型汎用電子計算機路線に対抗して DEC 社からミニ・コンピューター PDP-8 が発売されミニ・コンピューターが登場したが、1971年になってインテル社から4ビットのマイクロ・プロセッサ（MPU）が発表されるに至って、マイクロ・プロセッサを用いたマイクロ・コンピューター（＝マイコンあるいはパーソナル・コンピューター＝パソコン）の時代が始まる。現在ではマイクロ・プロセッサも8ビット、16ビット、32ビットと開発が進みミニ・コンピューターに匹敵する性能を持った物まで現れる様になり、以前には大型の汎用コンピューターでないと行えなかった事もかなり行える様になってきた。

コンピューターを聖書の研究に用いる事は、欧米諸国ではかなり以前から行われている様であるが、我国では極めて最近の事であると考えられる<sup>(1)</sup>。しかし、最近のマイクロ・コンピューターの上記のような発達に伴って16ビットのものであれば、聖書の全体を一応記憶容量の点からは取り扱える時代となった。それを以下に示してみよう。聖書の全体が必要とする記憶容量は、どれ程のものなのか。まずギリシア語新約聖書は、凡て1文字1バイトで計算できるので、Nestle-

Aland の第26版で概算してみると次の様になる。

$$\begin{aligned} \text{総ページ数} \times 1 \text{ ページの字数} &= \text{総字数} \\ 680 \quad \times \quad \text{約}60\text{字} \times \text{約}42\text{行} &= \text{約}171\text{万}3600\text{字} \end{aligned}$$

これは、異読も含み、発音記号およびスペースも1字と数えた場合の数字である<sup>(2)</sup>。従って、データの構造や検索上のスピードを考慮しても200万字、即ち2Mバイトあれば十分であるといえる。同様の考え方で旧約聖書を Kittel の BIBLIA HEBRAICA 第3版、Rahlfs の SEPTUAGINTA 第8版で計算してみると、それぞれ4Mバイト、7Mバイトとなる。以上は、ギリシア語やヘブライ語というような数字を含めて94文字<sup>(3)</sup>以下で言語表記が出来る言語の場合であるが、漢字を用いた日本語表記となると当然94文字では取まりきれない。この場合には1文字2バイトを必要とするので、日本聖書協会訳の旧新約聖書で4.5Mバイト（勿論の事ながら、これには異読は含まれない）が必要である。従って、我々日本の聖書研究者が、日常必要とする範囲の聖書の凡てが20Mバイトのハード・ディスク・システムの下で取り扱えるわけである。この様なハード・ディスク・システムを、16ビットのマイクロ・プロセッサは取り扱う事ができるのである。

ところで、コンピューターによってどのような研究が出来るのであろうか<sup>(4)</sup>。最も基本的で既にかかなりの方面で利用されているのが、(1)各種の索引作成作業である<sup>(5)</sup>。これは、コンピューターによって作成されてしまった印刷本の形態では、それほど新鮮さはない。むしろ、電気信号として記録されているものをそのままの形で用いる事が出来るならば、印刷された索引では出来ない複数条件による検索がそれを用いて簡単に実現できるので有益である。次に、(2)統計を用いた言語学的分析があげられる。これは多変量解析という統計学の方法を概念分析や文体分析等に適用したものである<sup>(6)</sup>。そして、(3)現在筆者が試みようとしているような意味関連の研究への適用である<sup>(7)</sup>。第一の研究のタイプは、基本的に単に文字データを電気信号に変換し、それを検索し順序よく並べて呈示すると云うことなので、データの入力が正確であれば、その段階で仕事はほぼ完成したも同然であると言える。第二第三のタイプの研究はこの正確なデータ入力の上に乗って成されるものであり、それ故にこのようなデータの蓄積は大切である。第二の研究のタイプは、そのようなデータを対象として数量的な方法で分析するものである。第三の研究のタイプは、文字データを対象として数量化しないで関係の観点（厳密に言えばそれも一種の数量化であると言えるのだが）から分析するものである。本稿ではこれらの内で第三のものに属すると思われる意味関連の研究としての語義域分析の考え方について述べたいと思う。

(1) 現在、コンピューターを用いて研究を進めている機関は、アメリカ、イギリス、西ドイツ、フランス、カナダ、イスラエル等であるが、これら以外の国でも始まっていると考えられ、今後はかなりの勢いで増加するものと思われる。我国で聖書の研究にコンピューターを用いることが始まったのは、少なくとも聖書学者達の間での利用が始まったのは、ここ数年の事であると思う。このようにスタートが遅れた理

由は、我国には聖書の研究者が極めて僅かである事に加えて、これらの研究者がコンピューターを研究条件の意味でも操作技術の意味でも自由に用いる事が出来ない状態にあったからである。さらに、反発心から敬遠心にまで至る極めて様々なコンピューターに対する心理的拒否という事もあるように思われる。そういった心理の底には、コンピューター＝数値計算と云う観念が潜んでいるように思われるが、現在では数値計算以外の分野での利用が目覚ましい事を認識するべきであろう。

- (2) コンピューターへの入力の際の問題として、発音記号等をどのように扱うかという問題がある。それらを含んだ形で1文字として記録する方式とそれらの記号もそれぞれ1文字として記録する方式とが考えられる。記録の仕方に依りて記憶に必要とされる記憶容量も変わってくる。これを更に進んだ方式、即ち、文法解析により発音記号等を付加する方法を開発すれば、更に記録は簡単になる。文法解析といっても、そこには文字通り規則を適用して解析する計算ベースの方法と予め慣用的な知識を記憶させておき、それを参照して解析する方法とがある。新約聖書のギリシア語については、後者の方法をより徹底的に遂行した GRAMCORD (1976年に Indiana University で始められたようであるが、筆者は熟知していない) というデータ・ベース型のコンコルドシステムがすでに出来ているようである。とにかく、この記録方式の問題は、データの互換性の問題と関係しており重要である。
- (3) 94と云う数字の根拠は、7ビットで文字等をコード化した場合に考え得る  $128 (= 2^7)$  通りから、通信・制御等に用いる34通りを引いた数である。2バイトでコード表現する場合も含めて文字のコード化については、日本規格協会編 J I S ハンドブック〔9〕情報処理 1984年版の p.231-240 JIS6220 情報交換用符号 (Code for Information Interchange) 及び p. 331-338 JIS 6228 情報交換用符号の拡張法 (Code Extension Technique for Use with the Code for Information Interchange) を参照。
- (4) コンピューターによって何が出来るかについての一般的な事については、A. I. Forsythe/T. A. Keenen/E. I. Organick/W. Stenberg, COMPUTER SCIENCE-A First Course [浦昭二訳：改訂 コンピューターサイエンス入門 1, 2. 1978年, 培風館] を参照。
- (5) 例えば、西ドイツの INSTITUT FÜR NEUTESTAMENTLICHE TEXTFORSCHUNG と RECHENZENTRUM DER UNIVERSITÄT MÜNSTER 編纂の COMPUTER-KONKORDANZ ZUM NOVUM TESTAMENTUM GRAECE VON NESTLE-ALAND, 26. AUFLAGE UND ZUM GREEK NEW TESTAMENT, 3rd EDITION (1980) や B. FISCHER 編の VULGATA-KONKORDANZ 5Bde., アメリカの B. EINSPAHR 編の INDEX TO BROWN, DRIVER & BRIGGS HEBREW LEXICON, CHICAGO, 1976, また、教父関係まで広げてみるとフランスの CENTRE D'ANLYSE ET DE DOCUMENTATION PATRISTIQUES 編の BIBLIA PATRISTICA, Paris, 1975 等があげられる。今後あらゆる分野での INDEX 的なものの作成作業にはコンピューターを用いる事が普通となるであろう。
- (6) 例えば、イスラエルの TECHNION-ISRAEL INSTITUTE OF TECHNOLOGY (HAIFA) の Y. T. Raddy/Haim Shore/Moshe A. Pollatschek/Dieter Wickmann らによる CASTLOTS (Computer-Assisted Statistical Linguistic Old Testament Studies) というシリーズが1973年来発表されている。彼らは、ZAW 94 (1982), 467-481 に Genesis, Wellhausen and the Computer という論文を発表し、Wellhausen の資料仮説をコンピューターによって検証している。統計に関する本は幾らでもあるが、パーソナル・コンピューターで統計解析をする場合の理論を例題とそれを実行する BASIC のプログラミングを付して集大成したもので極最近に出版されたものに次のようなものがある。田中豊・垂水共之・脇本和昌編「パソコン統計解析ハンドブック I 基礎統計編 II 多変量解析編」1984年 共立出版株式会社。但し、この本は統計解析の考え方の解説よりは BASIC プログラムの集大成の方に重点が在るように思われる。なお統計についての文献で論文中に過程として一部含まれるものを別にすると直接に系統的に統計による言語解析に関する方法を扱った単行本は見当たらないようである。もし有れば、御存じの方

は御教え願いたい。

(7) これら以外の別の研究分野への適用がすでにあるのかもしれないがそれについては筆者の知るところではない。

## 第2節 語義域分析と聖書釈義

聖書の釈義には様々な立場があるが、如何なる立場に立つにしても、文字によって記録されている聖書を対象とする限りは、「言語」について行い得るあらゆる理性的考察方法を適用する事が出来る。この意味において言語学の分野で行われている方法は、少なくとも文字としての聖書を研究対象とする限りにおいては、十分に適用可能であると言えよう。

言語学の分野ではかなり以前から自然言語処理<sup>(1)</sup>にコンピューターが用いられている様であるが、言語とコンピューターを関連付ける分野として主に二つの事柄があると考えられる。一つは形式言語とオートマトン<sup>(2)</sup>であり、もう一つはこれと並ぶものとしてではなくむしろこれを包含するものと言ったほうがより適切であると考えられる人工知能<sup>(3)</sup>である。前者は、有名な言語学者 Noam Chomsky の生成文法の研究に見られる自然言語の研究への数学的モデルの導入にその契機を持っており、これと計算機科学の研究上の内的な必然性が結合する事によって始まったもので、言語が生成する文法規則の形式を構造的に表示した場合、正規文法・文脈自由文法・文脈依存文法等の構造が見られるのに対応して、コンピューターの処理系を設定していくと、その構造的な処理系の指示に従って自動的に作動する機械（オートマトン）としてコンピューターが機能してくると云うわけである。後者は、人間の脳が持っている種々の認知判断機能を分析し、コンピューターによってシミュレートしようとするものである。従って、この中に人間の言語活動が含まれることは当然である。ところで、これらの研究は極めて高度なものであり、筆者が今試みようとしている事は、これらの研究の考え方をすぐ実現しようとするのではなく、これらの研究の中に見られる構造的なデータ理解の考え方が、筆者の研究上の意図と合致している点があり、そのような構造的なデータ把握の方法を適用する事である。そのデータ構造とは階層的な「木」構造やリスト構造である<sup>(4)</sup>。この試みについて少し具体的に述べてみよう。

かつて筆者は、筑波大学哲学・思想学系編『哲学・思想論集』第8号（1982）15-28 所収の拙論「ギリシア語聖書の研究～その構想」に於て、次のように述べた。

「キリスト教の成立の時代にあつては、経典言語を単純にギリシア語ともヘブライ語とも言い切れないのである。ギリシア語とヘブライ語との密接な緊張関係、「二位一体性」(Duonität) とでも称すべき関係が存在するのである。この関係は一種の翻訳上の問題とも言い得る。しかし、この関係は単なる翻訳上の問題に留まらないキリスト教思想の本質を形造る関係である。なぜなら、旧・新約聖書が出来上がってからの翻訳の問題なら、それは如何に本文に忠実に翻訳するか

という問題にすぎないが、ギリシア語—ヘブライ語という関係は、新約聖書そのものの成立の内  
に含まれる言語緊張関係として二次的なものではありえず、一次的なものとしてキリスト教思想  
の本質を形成するものだからである」(P. 18)。

このように、筆者はギリシア語とヘブライ語との二位一体性と云う事を考えたが、それは新約  
聖書の中に見られる旧約聖書の引用に限らず、あらゆる新約聖書本文の背後にヘブライ語との対  
応関係を考えて行くと云う事である。そして、その際の筆者の目論みは、ギリシア語として見れ  
ば幾らかの異なった用語が現われた場合にもその部分をヘブライ語で見ると極めて小数の、  
ひょっとすると一つのヘブライ語に帰すことが出来るような事態があるのではないか、それを捜  
し出そうとする事にある。そうする事によって、思想的に一見すると断絶しているように見える  
部分をより根本的に再検討して、統一的に把握する事を可能にしようとするのである。

このように考えて来ると単に一つのギリシア語と一つのヘブライ語がどのように対応している  
のかと云う研究(勿論、これが基礎であることは間違いないわけだが)だけでは十分に本来の目  
的は果せない事が判る。ギリシア語はギリシア語としてその文脈の中での他のギリシア語との緊  
張関係の内在りながら、同時にその個所には表記されていない他の関連語彙と緊張関係の内  
にある。更にヘブライ語とも同様な(と言ってもこちらの方は表記されていないが)緊張関係に  
あると言って良いであろう。このように縦横に関連した複雑な言語の緊張関係を捕えようとする  
ならば、その言語全体から組織的に把握する以外に道はない。

そこで問題になるのが基礎としての単語が如何なる意義素をもって機能しているかを明らかに  
し、同時に関連語群との結びつきを整理する Wortfeld(本稿では「語義域」と呼ぶ<sup>(6)</sup>)の研究の  
必要性である。語義域はその言語が生じ用いられる生活世界を鮮やかに浮かび上がらせる。熱帯  
の地方の言語は、「雪」のような語彙素を知らないであろうし、また魚が食生活の中心となっ  
ているような社会では魚に関する語彙素は、牛や羊等を食生活の中心としている社会よりも豊か  
であろうと思われる。さらに、少なくともある観点に於て対応すると考えられる語彙であっても、  
それが完全に一体一の対応を成しているとは言えない。その意味で語義域はその言語をもって生  
活する人々の生活世界、即ち経験の総体を呈示していると言えよう。この経験の総体は、他の語  
彙との関係を連想による連鎖関係や何等かのカテゴリーによる統一によって成り立たしめてい  
ると考えて良いのではないだろうか。そのように考えると、このような連想による連鎖関係やカテ  
ゴリーを基準として凡ての語彙を関連付ける事が出来るのではないかと考えられる。そうして一  
旦、その言語の語彙全体を関連付けられたとすると、その言語自体としては勿論主体的な核を持  
っているわけではないが、ある語られた文脈から当然出てくる核となる語彙素を最上位層とした  
語彙の階層構造、即ち経験の階層構造が随時に成り立って来るのではないかと考えられる。この  
際、個人的な経験の成長がその個人の意味素を拡張せしめ、即ち意味的な世界の拡大をもたら

し、言葉の理解においてより深い洞察を可能とさせると考えられるわけであるから、複数の言語によって思惟し得る人にとっての理解とそうでなく一つの言語によって思惟する人の理解の間に違いが在るのは当然の事と言えよう。即ち複数の言語世界を知っている人間にとっては、自分の母国語で語り聞く場合にも、その人自身の内にある意味的世界の広がりや既に母国語が本来持っていた語義域よりも豊かなものとなっており、それによって彼が語る場合には、その拡張された語義域から広がってくる経験世界に基づいて語るものであり、またその拡張された語義域の作用によって、母国語だけの人が理解するよりも広い理解の可能性の下で理解するのである。

このような語義域の分析は従来の Word-Study とどのような関係が在るのだろうか。新約聖書の言葉の研究にとって今日基本的に用いられているのは、Kittel-Friedrich の Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament 10 Bde., 1933-1979 であることは、この辞典に対する賛否にかかわらず認められるところであると思われる。この Kittel のとっている基本的な方法は簡単に言えば概念史的研究の遂行と言えるであろう。これ以後に現われた物に Coenen-Beyreuther-Bietenhard, Theologisches Begriffslexikon zum Neuen Testament 2Bde., 1967-1971や Balz-Schneider, Exegetisches Wörterbuch zum Neuen Testament 3Bde., 1978-1983 があり、前者は新約聖書の宣教の内容と形態にとって特別な意味を持つギリシア語を選び、概念に従って集め、各概念の初めにどうしてそれらが集められているかを簡単に記した後、各語の解説に入っており、又、後者は特に辞書的な性格を強く持った辞典である。前者は Wordfeld の発想を持っている点で我々の観点といくらか関係を持っているが、基本的には両者共に Kittel とあまり変りないと言っても良いと思う。そこで問題はこのような概念史の方法が積義にとってどのような機能を果しているかという事になると考えられる。これについては、概念史の方法が現代の我々にその語が持っている数々の意味素とその由来を説き明かししてくれるのに対して、語義域への注目はある個所でその時の書き手の意図した意味素をその文脈の他の語彙の語義域から絞り込む事によりその箇所に於けるより蓋然性の高い解釈の可能性を呈示する機能を持つと言えるのではないかと思う。その意味に於て概念史の方法を補完する働きを持つのである。

また、このような語義域の分析は共時的な研究であるので書き手の経験に関係させる事ができるのみか、読み手の経験にも関係させる事ができるので、積義される対象としての聖書のみならず、積義する主体としての読み手・解釈者自身が抱えている問題に対しても適用する事ができる。従って、語義域の分析は従来の心理的な聖書の積義と大いに係わりがある。というのは心理的な聖書積義は、解釈者の経験の豊富さ深さに大きく依存している積義であり、語義域の分析も意味の緊張・連鎖関係の分析として経験の層を分析するものだからである。ここに於て、聖書積義の問題は、より広義な問題としての聖書理解の問題へと進んで行くのである。

- (1) 日常、人間が話している言語を「自然言語」と呼び、これをコンピューターで扱う事を「自然言語処理」と呼ぶ。H. Tennant, Natural Language Processing, 1981 [森健一・河田勉・天野真家訳：自然

- 言語処理入門 1984年 産業図書] 及び草薙 裕著「パーソナル・コンピューターによる自然言語処理」1984年 工学図書 参照。
- (2) J. E. Hopcroft/Jeffrey D. Ullman, Formal Languages and their Relation to Automata, 1969 [野崎昭弘・木村泉・林健志・野下浩平・淀川英司訳: 言語理論とオートマトン 1971年 サイエンス社] 及び J. E. Hopcroft/Jeffrey D. Ullman, Introduction to Automata Theory, Languages and Computation, 1979 [野崎昭弘・高橋正子・町田元・山崎秀記訳: オートマトン 言語理論 計算論 I (IIは本稿執筆時に於て未刊行) 1984年 サイエンス社] 参照。
- (3) P. H. Winston, Artificial Intelligence, 1977 [長尾真・白井良明訳: 人工知能 1980年 培風館] 及び P. H. Winston/B. K. P. Horn, LISP, 1981 [白井良明・安部憲広訳: LISP 1982年 培風館] 参照。
- (4) 注の2, 3の他に D. E. Knuth, The Art of Computer Programming I, Fundamental Algorithms, Information Structures 1967 [米田信夫・笈捷彦訳: 基本算法/情報構造] を参照。長くなるので本稿では述べないが、「木」構造については家系図のようなものを、「リスト」構造については集合を想起された。
- (5) Wortfeld という表現は, Wortfamilie が同根の語幹から派生した言葉の集合を指すのに用いるのに対して, 意味的な関係によって集められるという点で異なっており Wähig, Deutsches Wörterbuch 1971 によれば, dem Sinne od. der Bedeutung nach zusammengehörige Wörter とある。因にシンチンゲル・山本・南原の現代独和では「関連語群」とあるが, この概念の機能的な面を強調して「語義域」とした。Wortfeld は固定しておらず一つではない。Wortfeld 全般については, L. Schmidt(hrsg.), Wortfeldforschung. Zur Geschichte und Theorie des sprachlichen Feldes, Darmstadt, 1973 参照。

### 第3節 聖書理解

このように言語を経験の集約と考え、それを媒介として考察を進める場合には、上述のように解釈主体自身の問題が生じて来ざるを得ない。この問題は宗教的理解にとっては本質的な問題である。なぜなら、様々な理解の可能性の中の一つの理解という事と、聖書の語る使信を正確に把握した理解という事とは異なると考えられるからである。この問題を聖書理解という場面の中で考察すると、聖書理解の多様性を構成している根本要素は、神の「啓示」と人間の「経験」と云う二つの事柄であり、これらに対する理解の違いが種々の交叉をなして異なる聖書理解を現出させると言い得るであろう。

ところで「理解」とは何であろうか。普通「理解」とは、理解する主体に対して外から投げ掛けられた事柄を、その主体が自らの経験として内在化する事であると考えて良いであろう。その場合、当然のことながら理解する主体の過去の経験との間に緊張関係が成り立つ。この関係には大別すると次の二つの形態、即ち、投げ掛けられた事柄に対する何等かの肯定的関係、何等かの否定的関係と云う形態があるように考えられる。これら二つの緊張関係は、主体に対して投げ掛けられた事柄の全体に対して生じて来ると同時に、その投げ掛けられた事柄の個々の構成要素に対しても個別に生ずると云う二重構造を持っている。投げ掛けられた事柄全体に対する関係は、

理解する主体の過去の全経験から導き出されたものであって主体の選択である。従って、これよりも上位の方向への探求は不可能な理解の最上層である。これに対して投げ掛けられた事柄の個々の構成要素に対する関係は、その構成要素の更に基礎となる構成要素へと下って行くことができる階層構造をなしていると考えられる。

さて、「理解」を以上のように考えた場合、「誤解」はどのように考えられるであろうか。「理解」と云うことが、投げ掛けられた事柄を何一つ過不足のない状態で内在化すると云う事であると厳密に考えるならば、そしてこれを「純粹理解」と呼ぶことにすると、我々の日常の「理解」は、ほとんどが「純粹理解」ではあるまい。「純粹理解」ではないと云うことが即「誤解」と解して良いのなら、問題は簡単である。「誤解」という言葉をそのように定義して機能的に用いるのならともかく、「理解」が上述のように階層的構造を成しているのなら、各層に於て少なくともその段階に於ては事柄と合致した理解が得られている場合がある事になる。勿論、この場合には最初の全体としての投げ掛けられた事柄に対する「純粹理解」とは異なるが、少なくとも誤解とは言い切れない。従ってもし「誤解」と云うことを問題としなければならぬとすれば、それは最上位の主体の選択の時点においてのみである。その際、個々の階層ではその階層での経験の照合がなされており、そこでの経験の不一致が最上位の主体の決定を促す要因となっているのだから、解釈や理解という次元に立って考えそれを分析しようとする限りは、この経験の層が如何に形成されているかと云う事の方がより基本的な問題とされるべきである。即ち、主体の意志決定としての選択——それは決断とも言えるが——の場面でのみ「誤解」と云うことを考える事にし、それ以外の場合に在っては「経験の違い」と云う表現を採ることにし、経験の分析を基本的な問題としなければならぬのである<sup>(1)</sup>。

そこで聖書の理解と云うことを考えてみよう。先に聖書の理解は神の「啓示」と人間の「経験」の理解を巡って様々な見解が生じて来ると言った。啓示とは何かという問に対してここで立ち入って考察する事は出来ないが、啓示を経験の媒介なく理解する事は不可能であると思う。それは啓示は啓示を受ける主体が決断を迫られる事柄であり、決断とは過去のあらゆる経験が集中する経験の最上層の段階だからである。そこに於ては主体は自由であり、過去の自分の経験世界からの帰結としての判断に従って行動する事も又逆に過去の自分の世界からの帰結に反して行動する事もできるのである。これに対して、これよりも下の階層にあっては許容され得る理解の幅があると考えられる。勿論、この中に純粹理解、的中という事が含まれていることは言うまでもない。そして、経験が広がり深まるものであるが故に、的中せざる理解もいつか真の理解へと辿りつく可能性を持っていると言える。

少し具体的に例えば、「神の愛」と云うことを考えてみよう。この場合小さな子供から老人に至るまで様々な年齢のそれぞれに異なった経験を持った人々がそれぞれに理解をする。当然の事ながら、かなりの異なった理解が存在すると考えられる。親の豊かな愛を受けて育っている子供

は、「神の愛」と云うことを完全には理解していないかもしれないが、自らに対して示されているある種の良きものとして恐らくは親の愛を媒介として肯定的に受け取っているであろう。しかし、十字架に示されたものとして「神の愛」を受け取るようになった人に在っては、その愛の理解はきわめて深いものとなっていると言えよう。また、人の世の愛の姿を様々に見聞きしてきた人にとっては、真に限りなく深いものとして受けとめられる事もあれば、どうしても信じられないものとして受けとめられることもある。このように様々な理解の形があるとしても、それらは上述の様に「経験の違い」であって基本的には「神の愛」に向って肯定的に開かれているか否かと云う点に収斂するのである。その際、その決断の時にあたって、その主体が肯定的な意味に於ても否定的な意味に於ても「にもかかわらず」と云う逆接的決断をすることもある。即ち、当然「神の愛」を信すべきである「にもかかわらず」信じないという決断をする場合、又、とても「神の愛」を信じられない様に見える「にもかかわらず」信じるという決断をする場合である。これらの場面は、啓示と主体との言わば闘技場である。

このような経験の階層性がどのようにして聖書の真理と結び付いているか、この凡ての構造を出来る限り明瞭に実証的に示す事が聖書釈義の業である。そして、この経験の階層性を分析する場合の方法が今試みようとしている語義域分析の方法である。

- (1) ここで経験の最上層としての選択・決断と云う事と関連して一般宗教的認識との関係について触れておきたい。理解が経験という階層を持ち、その最上層に於て決断を迫られるという事態を、もし一般宗教的認識の観点からしてキリスト教的な表現である「啓示」とは言わず「絶対者」と置き換えるならば、最上位の経験の層を形造る経験の階層構造は同じ構成形態のままに他の宗教の最上位の経験を形造る経験の階層構造を成していると言えるであろうか。もしこれが同一であるとするならば、キリスト教的な真理と他の宗教の真理との間に違いはないと言えるかも知れない。しかし、最上位の経験は、決断を迫るものであり単なる記号と化すことができないものであると思う。「イエス」という言葉はその意味で「絶対者」と置き換える事が不可能な言葉であると言えよう。更に、聖書の持つ様々な歴史的に制約された姿を「非神話化」して、聖書の真理を明らかにしようとする場合にも、この経験の階層性を無視すると、真に究極的な最上位の経験層を誤って削除し、聖書の真理を改竄することにも成りかねない。

## 跋

聖書の研究にコンピューターを高度に用いる為には、計算機科学・言語学・哲学・神学等の多くの分野に亘っての研究が必要であり、それらを一人の人間が行なうことは極めて困難である。その意味で本稿は意に満たぬ所を多く持っているが、コンピューターを聖書の研究に用いた場合に問題になると思われる事柄について幾らかでも指摘し得たとするならば、少なくとも当初の意図は果されたと言えるのではないかと思う。意に満たぬ所は何れ十分に叙述できる機会に補いたいと思う。

(筑波大学 助手 いとう としゆき)

## Wortfeldanalyse und Bibelauslegung

— Zur EDV der Biblischen Literaturen —

Toshiyuki Iro

Die bedeutende Entwicklung der Hardwaretechnik der Computers macht uns möglich, durch dem Micro-Computer die biblischen Literaturen zu verarbeiten. In dieser EDV (electronischen Datenverarbeitung) der biblischen Literaturen gebe es die drei Gebrauchstypen. Der erste Gebrauchstyp ist die lexikalische Arbeit wie zum Beispiel die Registerherausgebung, die elektronische Datennachschlagung. Der zweite ist die statistische linguistische Analyse. Diese beide Typen laufen schon auf der richtigen Bahn, aber doch sei der dritte Gebrauchstyp der Computers, die Bedeutungsbeziehungsanalyse, auf der Stufen von Versuch und Irrtum. Die Wortfeldanalyse der biblischen Literatur gehört zu dem diesen dritten Gebrauchstyp des Computers.

Das Wortfeld spiegelt die Welt der menschlichen Erfahrung. So die Wortfeldanalyse steht in Verbindung nicht nur mit der religiösen Erfahrung des Auslegungsobjekt, sondern auch mit derselben des Auslegungssubjekt. In diesem Sinne hat die Wortfeldanalyse der biblischen Literatur die Bedeutung einer Grundlegung zur psychologisch-erfahrungsmässigen Auslegung der Bibel. Der Computer ist sehr hilfreich für diese Wortfeldanalyse, weil diese Analyse mehrere Daten behandeln muss.